

## 〔特別寄稿〕

31

大学院特別講義録 2  
『臨床研究のすゝめ』～研究がつなぐ心理臨床の今～  
(2011年3月5日)

## 私の心理臨床研究の足取り

佐藤 忠司 (新潟心理相談システム)

## がんセンターの病室でふと考えたこと

どこを切り口として話をスタートしようかと思ったんですが、17、8年前のことから始めましょうか。平成4年(1992)、私は、がんの大手術(上行結腸がん)を受けました。がんセンターで、手術室に入ってから出てくるまでの間8時間。手術が終わった後、数日間、個室に入っていました。個室はちょうど、建物の西側、たしか4階だったかな。で、手術が終わった数日後、朝早く目が覚めて、こうぼんやり下を見ていると、4時半過ぎ、白山駅のホームにぱっと電気がつきます。しばらくすると新潟駅から1番電車が入ってきて、ホームに居た5、6人の人が乗って関屋の方に発車して行く。それを眺めていたとき、なぜか急に真剣に考え始めていました。

どういうことを考えていたかっていうと、「今回は命を預けてもらったな」ということでした。「～閻魔様は、今回、迎えに来たけども、お前にもう少し命預けておくれ、今回はお迎えはやめた～」と言っているような気がしました。「～もう一回娑婆での機会をもらった～」ついで、「命もらったんだからどうしよう、これから」と思いました。そこで考えていたことは、「今後、閻魔様がいつお迎えにいつ来るかわかんないから、それまでに何をすればいいかいな」、「やり残している仕事は無いかいなと、もしあるならこれは大至急しなきゃだめだ」と。予告も無くいつ迎えが来てももうOKですぜと言えるためにはどうすればいいかを、まじめに考えていました。

その考えの収斂していった先は、自分の心理臨床の足取りについてでした。私は昭和30年に心理臨床の仕事に入っています。それから現在まで50年以上、臨床心理の仕事やっているわけです。振り返ってみてどれが一番自分にとって大事な仕事だったか、今、形にしておかなくてはならないものはどれか、あれこれ真剣に考えていました。暇ですからね、がんセンターの個室でぼーっと考えていました。そこで気がついたことは、心理査定のデータ管理っていうこ

とでした。橘先生は知っていることですが、悠久荘時代からこれに類することはやっていました。今で言うファイリングシステムの工夫、これが完成しつつあった、これをどう形にしておこうか、これは心理臨床学にとって後輩たちにこれは伝えるべき義務があるだろうと考えました。

そうこう考えているうちに、片口安史先生との約束が頭に浮かんできました。昭和30年暮に、私は心理臨床の現場に入りました。2年ほどして私に国立精研からアンケートがきました。それを発送したのは片口先生・玉井収介先生たちだったんですね。「一体お前たちは病院で何してんの、以下のアンケートに答えろって」いうのでした。その後昭和35年に悠久荘に帰ってきってから、昭和38年1月に国立精研の心理学科研修に参加しますが、私がごちゃごちゃと書いてやったアンケートを片口先生が覚えていて、「あんたのはいろいろと参考になった、僕ら以上のことを佐藤さんは経験している、この経験は大事だと思う」と話してくれました。ある日私は、片口先生の著書・心理診断法(昭和31年刊、牧書店)を話題にしました。「このあとに一段上がった専門的情報が載ってないと現場に出た人が困ります、先生早く作ってください」とお願いしました。そのとき片口先生は、「冗談言うな、俺はこのロールシャッハ片口法を一生懸命作るから、この次の仕事は佐藤さんやってくれ」と逆に言われました。結局私にボールが投げ返された、宿題になってしまったのです。臨床に実際使えるような本を作れと、なんとなく片口先生との約束になっているんです。片口先生の研究者としての幕引きは1987年です。この年にロールシャッハシンポジウムっていうのがありまして、そのとき、このシンポジウムに来ていた藤岡喜愛先生(元は植物学者ですが、そこからロールシャッハ研究に入ってきた先生です)が私の発表を聞いてくださって、閉会后、後ろのほうから歩いてこられて、黙って手を出して握手してくるんですよ。それで一言ぼそっと「やられた」と言うんです。だんだんわ

かったのですが藤岡先生もロールシャッハ・データベースを作ったかったようでした。同じようなアイデアを持っていたけども、私が1200例以上のデータベースを出したものですから、握手して今晚飲もうぜとなりました。

藤岡先生には、「こういう仕事は絶対必要だ。一つ一つの事例のデータを基にしてきちん並べ、みんなに分かるように示すのは今誰も出来ないぜ」と。これは藤岡先生もやりたかったらしいと思うんですが、私の仕事を見て自分のアイデアをクローズしたらしいのです。応援はするけれども邪魔はしないっていう自然科学系の皆さんのスタイルで、きちんとやってくれました。次の年、1988年にロールシャッハ研究の30号にこの論文が載ります（文献1）。これがアトラスの元型です。藤岡先生は時々「どうなったデータは」と、学会で会うと質問してくれました。先生はその数年後に亡くなります。このほか村瀬孝雄先生や、村上英治先生もお前のあれは今は少数派かもしれないけど絶対に大事なものになるからと応援をいただいていた。

このように1992年、病室でやろうか決めたんですが、これが出版されたのは2004年（文献2）ですから12年かかりました。この間、ああでもない、こうでもない、と楽しみながらデータベースを整えて、打ち出すためのソフトを決め、プリントアウトは、どういうデザインがいいかなど考えて、結構楽しかったですね。

### この新潟青陵学園とのお付き合い

この青陵学園にご縁があって講義をし始めたのが、昨日ちょっと調べてみたら1995年10月からです。そのいきさつは、理事長の関先生から、うちの電話の理事会で同席したとき、「佐藤さん、すまんけどうちの青陵短大の学生にカウンセリングの講義をしてくれ」と頼まれました。そのとき最初は“カウンセリングの講義は短大の学生には無理かも”と断りました。心理学の基礎、臨床心理学の基礎が無いと難しいと。そのときの関先生の私に対する説得は力がありました。「ここの短大の学生たちは卒業したら二度と大学院レベルの本格的なカウンセリングの講義を聴くことが出来ないんだから、どうか頼む」と。それで数年やっていたんですが、3年ほどしたある日この短大の教授していました山下安雄さん（彼は私の新大人文心理の一年先輩です）が突然

やってきて、「佐藤さん、力貸してくれ」と言うんですね。理由を聞きましたら、この青陵短大を大学にしようって話が決まった、ついでには臨床心理学の講義をしてくれないかというんです。山下さんは中央児童相談所の所長をした人ですから、「あんたやりやいいじゃないか」と言ったんです。そしたら、彼は「自分は病気があつてとても、そういうことは無理だと思う。それでお前に頼みたいんだけど」と話してくれました。

事情を聞くとやっぱりこれはしょうがない、じゃあ俺やってみようかということで、学部が授業が始まりました。この中では青陵大学からまっすぐ上がってきた諸君もいると思うんだけど。こんな事情で、この青陵大の臨床心理学入門の授業は始まりました。そのとき私の講義のアシスタントについてくれたのが、本大学院助手の齋藤恵美さんや法務省にいる只野君たちです。

その後数年たったある日、今度は橘先生が来られて、「実は青陵大学で臨床心理士養成の大学院を作ることが出来そうな気がするけども」と話してくれました。私が構想はと聞きましたら、「2種指定校でいく」と言うんですね。私は「2種指定校だったら、1種校に上げるときまた苦勞するよ、最初から1種指定を取った方が」ということで、案を出しました。それをもとに橘先生が苦勞されて、間藤先生、田中先生はじめ、皆さんの力を借りて、出来上がりました。私もこの大学院の立ち上げに少し手伝うことになりました。このように、いろんないきさつで私はこの学園に関係をもって今まで来ました。私は12、3年前からかなと思って計算してみましたら17年前からでした。

### 水俣病研究と私

話題を変えます。今日おいでいただいている齋藤恒先生は、木戸病院の名誉院長先生ですが、2003年、私の家に突然おいでになりました。それまでは面識も無かったんですが、先生は、「水俣病のことで相談に乗ってほしい。胎児性水俣病、それから乳児性水俣病の人たちについて、この若い時に有機水銀を体内に取り込んだと推定できる人たちが今40歳代から50歳代になっている。この人たちの心の問題が国際的にも研究として取り上げられている。しかし臨床心理学的アプローチはまだなされていない。国際的に見ましても、実験心理学的なアプローチはあるけ

れども」と話されました。先生は私にそれを頼みにこられたのでした。私は関心がありましたが、実はそのときちょうど、“臨床心理査定アトラス”の原稿が追い込みの時期になっていましたので、先生に「それ待ってくれ、来年にはその本が出るから」と言って、私はお待ちいただきました。実は、あのとき私はこれで断ったと思ったのに、斎藤先生は一年間経ってもちゃんと忘れないで、「先生一年経ったけども本は出ましたか。じゃあ暇になったはずだ」と。この時から水俣病の患者さんたちとの付き合いが始まりました。2004年秋からです。

### まとめておきたかったこと—臨床心理における倫理論とつづやき集合論

「臨床心理査定アトラス」を2004年に出版しての感想は、“まだ何か自分の仕事で活字になっていないものが残っているな”ということでした。その一つは、「臨床心理学における倫理」という講義を数年前から秋田大学、放送大学、名古屋大学、大妻女子大などの大学院で集中講義で行なっていました。これは次に活字にしないでとは思いました。おかげで、この内容のものはいくつかの臨床心理学の概論書や事典に載せることができました（文献3、4）。

もう一つは、『つづやき集合論』と自分で勝手に名前をつけている、臨床場面においてまとまってゆく体験の道筋の記録です。臨床場面でのぼんやりした初体験が、しばらくすると他の体験とつながって、納得できる姿になってゆく。事例を通してこの収斂経過みたいなものをどうやってみなさんに伝えればいいかなと思っていました。たまたま本学大学院の紀要の第2号に半分ほど載せました（文献5）。まだ書き足りないと思っているのですが、どうか興味のある方はお読みください。

### 臨床間主観論と間臨床主観論は互いに相容れないものか

お手元に配布した資料が次の話題です。後ろの方の数字は、今は読み飛ばしてください。今取り上げたいのは、第1ページです。“はじめに”と書いたところが、ちょうど今日のテーマに繋がるかなと思って、この本を持ってまいりました（文献6）。

私は心理臨床の研究方法論は、2つあるなと思っています。「臨床的間主観」を拠りどころとする立場

と「間臨床主観」を拠りどころとする考え方です。「間主観」はフッサールの言葉です。間主観性という単語は私の学生時代、実験心理学の講義のとき、散々耳に叩き込まれました。私はこれに『臨床』の場面をつないでみました。「臨床的間主観」による研究法を基礎にしているのが私の“臨床心理査定アトラス法”です。

一方、『間』という字の居場所が違う「間臨床主観」という立場こそ、事例性を大切にする心理臨床論の根幹を成している立場だと思っています。自然科学的方法論と異なる人間科学・社会科学的方法論は、この二つが揃っていて初めて成り立っていると私は考えます。この「間臨床主観」という考え方が上手く出ているのが、いわゆる事例研究です。どうかこの両者を、臨床心理学を背負っていこうとする君たち若い人は、しっかり持っていてほしいと私はいつも思っています。

これについて注目される対談があります。河合先生と鷺田先生の対談です（文献7）。このなかで河合先生が言います。「臨床的科学は、アートとテクノロジーの間みたいなものだ」と。ちょっと間を置いて今度は鷺田先生が、「ジャコメッティが言っているが、一人の人間を描ききってみると、何故かその人の顔が、誰の顔にでも似てくる、普遍的なものが生まれてくる」と応えます。この対談には事例研究論のエキスが、潜んでいると思います。

我々の臨床心理士業務の開始時、いつでも通称見立てと言われている仕事が行われます。しかしそれは、最初一人の臨床心理士の主観的な見立てですから、それが間違っていることもあるわけです。ですから、その考えが間違っているかどうかについて、別の角度から検討する手法を各自が持っていないと大変なことになるかも知れない。これを防ぐことを自分は身につけたいという想いから、アトラス作りに取り組み始めたようです。自分でまとめた現在の事例に対する判断にもし誤りがあったらいけませんから、その事例について立場の違う発想から再検討する手法がほしいと。このように間臨床主観の見立てを臨床間主観の見立てから再検討するという、二つの発想を上手に使いこなしていくことが、私は心理臨床をやる人間の大切な姿勢じゃないかと思っています。

ちょっと脱線しますが、私にはもう一冊、「臨床心理査定アトラス法への招待」という本があります（文献8）。そこの対談で心理臨床アート論について

のやり取りが載っています。“心理臨床の仕事はアートではだめだ”のコメントと、“アートがだめとは言わない。アートの方も必要、それと従来の心理学をベースとするような発想も必要、この二つが無ければ心理臨床はやっていけない”という風な議論です。心理臨床の世界のルーツを辿っていくと、そこには、間主観性というものから生み出された知見が組み込まれていることに気づきます。アートの方を前面に出しすぎて他の立場を排除してゆくと、心理臨床のルーツまでも否定することになりますから、自己矛盾が起きてしまいます。このことをきちんと我々は勘定に入れておく必要があります。

河合先生の話なぜここで引用したかという、先生はアートとテクノロジーの間にあると言っている。だから河合先生自身、アート論オンリーじゃないのです。アートと従来型の知識の真ん中に、心理臨床の本当の世界があると言っているわけですから、これはまさにその通りだと、私は同感しています。

### 心理臨床的工作から研究的な姿勢を

先ほど述べた水俣病研究の仕事は、心理臨床の分野では今まで誰も研究発表を行っていない分野のようです。2003年にテーマをいただき、斎藤先生の所にときどき邪魔して、データを取らせていただきました。熊本学園大学の前田正純先生からも色々教えていただきました。今まで論文に少しまとめました（文献9、10）。

心理査定室・カウンセリング室以外の仕事場、コミュニティ・アプローチまたはフィールド・アプローチの世界も臨床心理士の守備範囲に入れてほしいと思っています。大学院では、まず基礎勉強をしなければだめだから、心理検査室とか箱庭、プレイルームの仕事の修得に力を入れても良いけれども、卒業して現場に出たら、必ずこのフィールドワークのセンスが無いと勤務者としてうまくゆきません。フィールドワークがしっかりできることによって、新しい心理臨床の世界が広がってゆきます。

私は日本の心理臨床学の発展を結果として見続けてきましたが、今この専門領域の将来に不安を感じています、筋肉がついていないと。骨と皮だけじゃだめです。筋肉がどうしても必要ですね。君たちへの期待がここです。君たちは現在一所懸命、心理臨床の専門書を読んで勉強をしていますね。どんどん

先輩たちの作り上げた仕事を、吸収する・かじりながら成長しているんです。しかし、どんどんかじっていったら最後吸収するもの・かじるものが無くなります。専門知識は補給しなきゃだめです。研究的な姿勢でその補給をしなければだめです。自分たちが育ててもらった世界がガタガタにならないように、臨床実務から知識を作ることが出来なければ皆さんの将来は無いと思ってください。

私は自分の研究的・調査的作業がいつ報われるのかをあまり考えていなかったようです。この面についてギブ・アンド・テークの要求は私の気持ちとしては薄かったですね。作る楽しさは大いに楽しみましたが、しかし、私のこのアトラスは思いもかけない時、今回の一連の水俣病・有機水銀曝露者の研究計画の対照例選びの時に、見事な助太刀を準備してくれました。自分の育ててきたデータベースが、現在の研究手法でランクの高い仕事の源データを作りつつあったことに驚きました。ペアマッチ例を選ぶことがいかに難物の大仕事かは、経験した研究者にしかわかりませんが、この作業を、私のアトラスの源データベースは、完全な情報量ではありませんが、瞬時にして、一例一例に対する対象例群をパソコン画面に示してくれました。一気に論文の格を上げてくれました。

### 過去から学び将来に責任を持つこと（※）

私には「日本人と水銀の交流史」の内容の論文があります（文献11）。有機水銀曝露の問題を考えて論文にまとめているうちに、その時の自分の知識では序が書けないことに気づきました。確かに前田正純先生の論文からは、現在の地球上で起きている水銀汚染の状況は学べるんですが、なぜこのような汚染が起きてしまったのか。日本人は以前からの日常的な水銀をそれほど嫌っていなかったのではないかな。すぐ身近に昔から存在していたのではないかな。それで曝露被害はなかったのか。この疑問を自分なりに追いかけていましたら、ひとつ論文が出来上がりました。皆さんのお手元に差し上げた図（水銀汚染のクロスロードを展望する）の縦軸部分の資料がそれです。これは新潟青陵大学大学院在職中に開始し、途中経過をまとめたものですが、このように謎を自分の手で解きほぐしてゆく作業は、推理ドラマの謎解き用資料集め作業とよく似ています。

この論文は確かに心理臨床学の領域から見れば、



はみ出してしまった論文です。しかし心理臨床学徒として疑問を追いかけて当然行き着いた結果、出来上がったものと自分で考えています。わからないことにぶつかった時、そこから楽しいことが始まるのです。自分でなくてはできない仕事がこの時から始まります。

水俣病研究に関わらせていただいて一番気になったことは、このようなことを将来起こしてはならない、未来に禍根を残してはいけない。どうすればいいのか。そのためには過去から学べるものがあるはずということから、この文献検討は始まりました。この取り組みは未完で現在も続いています。

一年ほど前、青陵大大学院在職中の最後の研究費で“勢陽五鈴遺響全巻”（文献12）を購入してもらいました。奈良大仏建立と水銀汚染の問題を追いかけているうちに必要になったものです。水銀中毒関係文献を色々浅読みしていて、どうも奈良大仏の建立時に現在で言う重金属汚染があったらしいことに気づきました。最初いくつかの学術論文のほかにも、手に入りやすい一般書、たとえば一連の杉山二郎の著書や郷土史家の田中八郎の著書などを読みしました（文献13、14、15）。その経験から真正面から文献を読んでいては関心事に辿り着けないことがわかりました。ちょうど靴の上からかゆいところを掻いているようなもどかしさを経験しました。また現代人の考え方を捨て、奈良時代の人々の心になって読むことの大切さも感じました。アマチュアといわれ研究資料として軽んじられているもののなかに、庶民の心が生き生きと表されているものがあることも知りました。

私が最初欲しがっていたのは事実在即した史料のようでした。しかし古代の史料は祈りのなか、経文と香のなかに組み込まれて記録されていました。また奈良時代の国家の公文書（日本書紀・続日本記など）を書き編纂した人々の心を感じながら、これら文書は読まなければならないことにも気づきました。現代に生きている我々にとって、奈良時代の人々の心に近づくことは、推論の積み重ねで辿り着くことが精一杯と謙虚にならざるを得ませんでした。またクライアント・センタードのチームが、これらを読む作業のなかで、生き生きと心の中から浮かび上がってきたことも経験しました。

東大寺の境内に白蛇川という小川が現在も流れています。その下流は佐保川です。天平末期、この川の下流で起きたことに対し、金光明王最勝経が頻繁

に詠まれ、悪魔祓いの呪術的儀礼が行なわれたと、当時の国の公文書である続日本記には記載されています。しかしなぜその儀礼が行なわれたか、理由は書かれていません。確かに当時の知識水準では原因探しは困難であった、怨霊・悪魔退散を祈ることが当時としては最善の行いであったと推測されますが。

この疑問についての謎解きは2年間ほど中断になっていたのですが、思いもかけない本を読むことで一気に進行しました。谷川健一・大江修対談書に『「三重」の由来と水銀中毒』の項があり、そこではある神社の社有田から収穫された米を食していた家族から次々と嘔児が出生したことについて記載されています（文献16）。

江戸時代末期の書籍“勢陽五鈴遺響1”（文献12 P217）からは次の箇所が引用されます。

～足見田の社域の東にオシミ田という地あり、往昔神田なり、後世に至り民俗の買得て転耕するにいたり、其の佃る者必ず嘔児を産めり。～

また吉田東伍の大日本地名辞書のなかには、この地・水沢について「～辰砂現出す、土砂中に往々水銀の滴り居ることあり～」の記載があるといえます。確かに奈良時代の出来事と江戸時代末期の書籍とを結びつけることは危険な面もありますが、水銀汚染田の記述として見逃せないと考えました。

これらの資料をつないで読んでみて、佐保川の流域には水銀汚染または重金属汚染があったのではないか、それを鎮めるための行為が祈祷であったと私は考えています。このようにばらばらの情報を結びつけひとつの出来事を浮かび上がらせ、学問的情報として確定に近づける仕事も必要なと考えています。

奈良時代の我々の祖先がいかなる日々を送り続けたか。人としての悲しみと喜びが縫い合わされた史実が目の前に現れてくることに、身の引き締まる経験も味わいました。

（※当日、時間の制約で話せなかった部分について、原稿から補足し最後に加えた。）

## 引用文献

1. 佐藤忠司（1988）：心理アセスメントにおけるスキーマの検討、『ロールシャッハ研究』30 11-24
2. 佐藤忠司（2004）：『臨床心理査定アトラス』培風館
3. 佐藤忠司（1990）：家族・障害者の社会的権利と援助『臨床心理学大系』4 196-215 金子書房
4. 佐藤忠司（1992）：倫理 『心理臨床大事典』29-33 培風館
5. 佐藤忠司（2008）：心理面接者の「つぶやき集合」の収斂過程について 『新潟青陵大学大学院臨床心理学研究』2、25-36
6. 佐藤忠司（2011）：臨床心理査定アトラス『2011年版試用MAP』新潟青陵大学
7. 河合隼雄・鷺田清一（2003）：『臨床とことば』46-49 TBSブリタニカ
8. 下山晴彦・佐藤忠司（2007）：対談・「臨床心理査定アトラス」から21世紀の心理臨床を考える『臨床心理査定アトラス法への招待』、180-195 培風館
9. 佐藤忠司・齋藤恒（2010）：出生前後に有機水銀曝露を受けたと推定される人たちの35～53年後の人格像『水俣学研究』 no.2 47-59
10. 佐藤忠司・原田正純（2010）：水俣湾岸に居住して出生前後に有機水銀曝露を受けたと推定される人たちの46～67年後の人格像 『新潟青陵大学大学院臨床心理学研究』 4、5-10
11. 佐藤忠司（2009）：日本人が経験した水銀汚染の史的検討 『新潟青陵大学大学院臨床心理学研究』3、5-13
12. 安岡親毅著・桑田正邦校訂（1974）：『勢陽五鈴遺響1』 217 三重県郷土史刊行会
13. 杉山二郎（1986）：『大仏以後』 259 269-270 学生社
14. 杉山二郎・山崎幹夫（1990）：『毒の文化史』62-63 学生社
15. 田中八郎（2004）：『大和誕生と水銀』 彩流社
16. 大江修編（2006）：『魂の民俗学・谷川健一 of 思想対談』219-221 富山房